

# 人類以前と人類以後

## 『白鯨』第104章「化石鯨」における隔時性

小林 正臣

### 1. はじめに

『白鯨』(Moby-Dick)の第104章「化石鯨」(The Fossil Whale)において、語り手イシュメールが鯨の化石を驚異と戦慄をもって語るのは、それが人類以前と人類以後という隔時性を賦活するからである。そして隔時的な存在をめぐる考究は、まさにイシュメールが追究する鯨学(cetology)のように、科学的かつ哲学的——すなわち学際的——な様相を帯びることになる。実際、21世紀に入って登場した地質学や哲学等における外部性の探究は、人間の脱中心化に向けた隔時性の探究と捉えることもできる。よって「化石鯨」における隔時性は、時空を超えて思考するための起点となりえる。この新たな知の可能性を秘めた章に注目して、本発表はイシュメールが驚きと慄きを覚える隔時性をどのように発展的に考えることができるのかを探る。

### 2. 人間の時代とその外部——人新世、化石鯨、ポストヒューマン

いわゆる「人新世」(Anthropocene)という地質年代は、人間活動による地球環境への影響力を明示している。人間中心主義からの脱却が提唱される現代において、この地質区分は人間の時代だけでなく、その外部の時代への関心も否応なく高める。そうした関心に応答できる文学作品が『白鯨』であり、とりわけ第104章である。

「化石鯨」は鯨学が展開される章の一つである。本章でも言及されるフランスの博物学者ジョルジュ・キュヴィエ(Georges Cuvier)らによる古生物学や比較解剖学の発展によって、アルプス山脈、イタリア、イギリス、フランス、そして北アメリカでもルイジアナ州、ミシシッピ州、アラバマ州など、地球規模で発見される鯨の化石は、鯨が絶滅の危機を乗り越えながらホモ・サピエンスが属する新生代第四紀以前の第三紀には存在していたことを明らかにした。これら発見に基づきイシュメールは、聖書にも登場する海獣が“pre-adamite”(440)——「アダム以前」——からの存在であると強調する。また同章では、“I am, by a flood, borne back to that wondrous period, ere time itself can be said to have begun”(441)とも語り、人類以前の時代への驚きを表明している。

人類の誕生以前から鯨は生きていた——この18世紀後半から19世紀前半における科学的発見への驚きは、イシュメールにおいては慄きと対をなしている。“I am horror-struck at this antemosaic, unsourced existence of the unspeakable terrors of the whale, which, having been before all time, must needs exist after all humane ages are over”(441-42)。このように、「モーゼ以前」からであるだけでなく「人類史以後」の存在でもありえる鯨に対して、得体の知れない戦慄に襲われている。この戦慄は、人類も他と同じく絶滅する種であることを前提としているから、すなわち文字通りにポストヒューマンの時代が到来することを想定しているからこそその体験である。かくして人類以前と人類以後を体現する怪物リヴァイアサンに対して、イシュメールは大いなる驚きと慄きを覚える。

### 3. 共時性に先立つ隔時性——レヴィナスとメイヤスー

現在から隔てた過去や未来という時間の在り方を、ときに哲学では「隔時性」(dia-chronicity)と呼ぶ。分離・区別を意味する接頭辞dia-を含むこの概念は、共時性(synchronicity)の対立概念である。20世紀後半フランスの哲学者エマニュエル・レヴィナス(Emmanuel Levinas)が説くように、共時性における過去や未来は、現在から想起もしくは予期される、時制としては現在に属する範疇である。他方の隔時性においては、現在と過去、現在と未来とのあいだには共約不能な断絶が存在し、現在までの時間や現在からの時間を眺望することができない。それゆえ隔時性は他者性としても論じられる——「レヴィナスにおける『隔時性』は、認識による把握を可能にする共時性に先立つ次元にあって、他者との対面において際立つ時間であるとされる」(山口 231)。

この隔時性という特異な時間の哲学は、21世紀前半に再び登場する。レヴィナスと同じフランスの哲学者であるカンタン・メイヤスー(Quentin Meillassoux)は、哲学書としては異例の世界的反響を呼んだ『有限性の後で』(After Finitude)において、人類の誕生以前ひいては生命の出現以前——彼の用語でいえば「祖先以前性」(ancestrality)——を射程に入れる一方で、人類の消滅以後をも視野に入れて新たな問題系を提起している。まず第一章で“the world that is posited as anterior to the emergence of thought and even of life”(10)に注目して人類以前を、そして最終章で“possible events that are ulterior to the extinction of the human species”(112)に注目して人類以後を論じる。これら人類以前・人類以後という空白の時代を問題とするのは、人間の思考から独立した存在について試論するためである。いわゆる物自体を再考しようとすることから「ポスト・カント派」と称される

こともあるメイヤサーの哲学が思弁的実在論 (speculative realism) と呼ばれるのは、まさに人類の誕生以前と消滅以後という隔時性——彼の言葉でいう「大いなる外部」(the great outdoors)——を探求しているからである。

この探究は現代の人文科学に影響を与えている。例えばクリティカル・ポストヒューマニズムを標榜するステファン・ハーブレクター (Stephan Herbrechter) は、著書 *Before Humanity* において、人類以前・人類以後というメイヤサーの視点を援用して文学作品等を論じている。序章で作者は、いかに before という単語が、それゆえ before humanity という表現が多義的であるかを指摘する (xi)。この表現は、人類の以前にある、あるいは人類の眼前にある、またあるいは人類の前途にあるというように、過去・現在・未来のすべてを内包する。そして、このように人間の時代としての現在を起点としつつも、むしろそこから隔絶した過去や未来を想起させるのが隔時性という時間論であり、20 世紀後半から現代までの哲学その他の知の領域において発展を続けている。

#### 4. 未完の鯨学——失敗による成功

しかしメルヴィルは、すでに 19 世紀中葉に隔時性を提示していた。鯨の進化の共時的な理解においては、化石という現存するものが物証となる。他方で隔時的な理解においては、鯨自体とでも呼ぶべきものが問題となる。実際、「化石鯨」における語りの中心は、化石それ自体というより、化石では把持できないものである。したがって、イシュメールの隔時的な時間における人間は、いま・ここに現れないものに対して主体的な立場にはない。換言すれば、そのように先立つものとの関係においてのみ自己は意識されて、事後的に主体が立ち上がる。このように考えると、イシュメールという人物はエイハブ船長と対照的である。端的な例を挙げると、“Is Ahab, Ahab?” (521) という自問に “Ahab is for ever Ahab” (539) と自答して、あくまで自己であろうとするエイハブと異なり、イシュメールは “Call me Ishmael” (1) と冒頭で宣言してからはその名のみを使うが、そう呼ばれることは殆どないにもかかわらず特に気にかける様子もないことから、自己意識が相対的に希薄である。そして、この希薄さゆえに人類以前と人類以後への驚きと慄きを率直に表せるのではないか。いずれにしても、隔時的な感性を備えたイシュメールにとって、人類なき過去と未来に生きる鯨は、まさに人知を超えている。

人類の歴史を超えて地球の歴史から鯨を捉えようとするイシュメールの鯨学は、すべてを包摂しようとする学問である。第 104 章で語るように、すべての科学を含み、鯨・人間・その他すべての (マストドンのような絶滅種を含む) 生物を含み、さらには過去・現在・未来のすべても含む学問を確立しようとしている。しかし、まさに「鯨学」(Cetology) と題する第 32 章で “This whole book is but a draught—nay, but the draught of a draught” (138) と結論しているように、すべてを網羅する鯨学は未完に終わるほかない。しかし、そのように失敗することが必然である一方、失敗することで隔時性の有効性を示すことには成功しているともいえる。さらに注目すべきは、レヴィナスやメイヤサーにおいてとは異なり、隔時性は鯨として具現化している。イシュメールにとっての鯨とは、いうなれば「他者」であり、人類以前と人類以後という「大いなる外部」なのである。

#### 5. おわりに

他者性や外部性に代表される隔時性の体現者である限り、鯨は不滅である。しかし生物である限り、絶滅の可能性は過去と同様に未来にもある。絶滅という現象はキュヴィエらの自然科学者たちによって 19 世紀前半には事実とされ、多くに受け入れられていた。しかし、SF 作家ジョン・W・キャンベル (John W. Campbell) の代表作「影が行く」(Who Goes There?) において人類なき 2000 万年前に南極に飛来したエイリアン——“It’s been frozen there ever since Antarctica froze twenty million years ago” (21)——が 2000 万年後も氷結されて生存する可能性が示唆されるように——“Put it back where it came from and let it freeze for another twenty million years” (31)——人類以前から存在し、人類以後も存在するであろうものが滅びゆくさまを人類は目撃できない。その意味でイシュメールの驚きと慄きは、現代でも有効である。そして、これら鋭敏な感性をどのように発展的に解釈していけるかは、これからの人文科学 (post-humanities) としてのアメリカ文学研究に委ねられているのだろう。

#### 引用文献

Campbell, John W. *Who Goes There? Rocket Ride Books*, 2009.

Herbrechter, Stephan. *Before Humanity: Posthumanism and Ancestrality*. Brill, 2022.

Meillassoux, Quentin. *After Finitude: An Essay on the Necessity of Contingency*. Translated by Ray Brassier, Continuum, 2009.

Melville, Herman. *Moby-Dick; or, The Whale*. Signet Classic, 1998.

山口美和「レヴィナス後期思想における『隔時性』概念と倫理的〈主体〉をめぐって」東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室紀要 40 号、2014、pp. 231-41.